

平曲における感情表現

——登場人物の発声とその曲節——

鈴木孝庸

はじめに

私は、一昨年「平家語り」と題する小論を書いた（松尾葦江編軍記物語講座第二卷『無常の鐘声』花鳥社。二〇二〇、七。所収）。本稿は、それに書いたことの一節に関して、補足的な考察を行おうとするものである。右の拙稿は、

i、平家語り（平曲演誦）の基本として、演誦者と語り素材（テキスト）との関係、対応

ii、平曲の音楽的構造の基本

iii、物語が大きなひとまとまりであることと、平曲の一句一句の構成分力、一句一句の独立的傾向、

iv、—平家物語研究と平曲研究の接点のひとつとして—曲節注記つき平家物語テキストの紹介に関する工夫の歴史

を述べ、平曲研究が文学研究としても次の段階に進もうとするならば、**曲節**（ふし）（**旋律型**）（せんりつがた）次元だけでなく、**墨譜**（はかせ）（音指示の記号）次元に踏み込む必要があるだろうと、述べたつもりである。

本稿は、右のうちのiに関して補足してみたい。特に問題にしたいのは、語り手（演誦者）が、語る（平家物語の）本文および内容に対して、どのような心構えが必要なのかということ、「感情移入」「思い入れ」が

大事だと記されていることに関することである。なお、本稿での検討は曲節次元までであり、墨譜次元に踏み込むことはない。

私は、『當道要抄』（国文学研究資料館文献資料部「調査研究報告」第七号。一九八六、三）の記述を引用して、「演誦者には語る内容への共感が大事と述べながらも、過度の没入を無共感よりも悪しと誠めるところを注目すべきだと思う。」と述べた。ここに当該の『當道要抄』の記述を再引用するが、行を改めたり傍線等を附したりする。

……平家物語は我朝の史記眞俗様規共申侍れば文讀に均して諸人の耳に届様に語るへし

返々尊々殊勝成処をハ我も随喜の思ひをなし

拾などをば我と文義をなし

軍場をば我も合戦の思ひをなし

哀成処をば我も袖をうるおし

狂言綺語の所をば我も其身に成て

似つかハしく語りなせるを以上手とす

然とて餘思ひ人の過たるハ思ひ人の無よりもあし、
（底本は、国会図書館蔵橋本経亮の寛文八年（二六六八）書写本）

難解な箇所がいくつかあるが、その検討は行わない。傍線部で繰り返される「我も（我と）」の「我」は演誦者自身を指すのだが、「似つかハしく」とは、演誦者が平家物語の「その場」に居るようにとか、登場人物の「その人」であるかのように――再現してみせる（聴かせる）――語ることが出来るのが「上手」だということであろう。そしてそのことが可能になるのは、演誦者自身がその気になることなのだと考えているのである。一応なるほ

どと思う。しかし、私は『當道要抄』がそこで教えを止めていないことに注目していて、二重傍線部にあるように、人物・場面・テキストへの過度の思い入れは逆の効果をもたらすのだと諷めているものと読んでいます。なお、私自身の師よりの教習体験の記憶では、「その人物の気持ちになつて語れ」などということとはなかったと思う。^{注1}

ところが、現代の平曲教習の場において感情移入演奏が指導されている系統もあるらしい。考え直してみると、たしかに、平家物語テキストを再現・再説する演誦藝として、テキストへの接近、理解、感情移入がなければ、聴き手の心をうつことにならないかもしれない。しかし、今少し、角度を変えて検討してもいいように思う。

取り上げる問題は、師から弟子への技藝伝授に関わることだが、私は伝授（伝受）の実態を追求するということよりも、平曲譜本の譜記が、その伝統的なあるべき姿を伝えていると考える。

以下、平曲譜本群の中の最終完成形と言うべき『平家正節』（尾崎家本による）をもとに、演誦者がテキストほどの程度「思い入れ」をするような形になっているのかを検討したい。^{注2} そのことによつて、伝授（伝受）の歴史的あり方が見えてくると思う。

一 平曲における「思い入れ」傾向の曲節とその現れ方

平曲の主要な曲節は13ほどだが、それぞれの曲節の大きな傾向を踏まえたとしても、定められている曲節または墨譜の、使用音域の高低に関わりなく、あるいは声の細かな操作の有無に関わりなく、演誦者が意識的に強調的な発声を行うならば、またはたとえ演誦者の独りよがり終る結果になるとしても、聴き手にある効果をもたらすならば、「思い入れ」を特定して検討することは至難である。

しかし、平家物語テキストと曲節との関係を見ると、物語中であって登場人物が一人称的に（直接話法的に）発言する場面がしばしば出てくるが、そのうち、その人物が感情的な発言をしていて、曲節もそれに合わせたかのように思われる曲節が配分されている傾向を認めることが出来ると思う。その曲節は、

その一、〈折声〉
（ありこえ）

その二、〈強声〉…〈甲声〉〈高声〉とも

である。この二曲節は、音楽的に他の曲節と大きく異なるのは、他の曲節が四度音程を基本とするのに対し、こちらは二度音程に特徴があることである。^{注3}狭い音程を使用することで、気持ちの高ぶり、切羽詰まった訴えなどを発声表現するわけである。

〈折声〉と〈強声〉の扱うテキストを一例ずつあげることにする。

〈折声〉…木曾最期で、今井兼平が涙ながらに主君・義仲に自害を勧めることば。

……涙をはらくとハツミ流ひて

〔折聲〕弓矢取は年来日來いかなる高名候らえども最期に不覚しぬれば永き暇にて候ふなり御身も疲れさせたまひ候ら

ひぬ御馬も弱ッて候らふ〔口説〕味方に續御勢も候らわねは大勢に押へだてられて云かひなき人郎等に組み落されて御頭

取られさせたまひなは此日來日本國に鬼神と聞へさせたまひたる木曾殿をは何某の郎等の討奉ったりなど申されん

事口惜かるべし唯あの松の中へいらせたまひて静に御自害候らえと

申ければ……

〔強声〕…源義経が、奈須与市が扇の的を射よとの命令を辞退したのを、叱りつけてのことば。

……判官大きにかつて

〔強声〕今度鎌倉を立ッて西國へ赴かんずる者共はみな義経が命をば背くべからず〔白声〕夫に少しも子細を存ぜん殿原は是より疾とう鎌倉へ下らるべしとぞ
のたまひける

いずれも、登場人物の発言であり、かなり強い調子の発声だったかと想像されることばである。しかし、ここにあげた例は（あえてそのような例にしているのだが）、それぞれの発言を〔折声〕なら〔折声〕でまるまるでなく、〔強声〕なら〔強声〕でまるまるでなく、途中から〔口説〕や〔白声〕という、言わば地味な曲節に移してしまうのである。〔口説〕は、平曲全体を支える最も基本的基盤的な曲節であり、〔白声／素声〕は、〔口説〕の変異的な曲節と見てもよく、〔折声〕または〔強声〕を承けるこの二曲節は、登場人物の声を演誦者の声に直して（近づけて）表現しているかのような効果のある曲節である。右にあげた例の、

〔折声〕 ↓ 〔口説〕

〔強声〕 ↓ 〔白声〕

は、兼平なり義経なり登場人物の感情的なことば（波線部）を、演誦者が「思い入れ」て発声すべきかのように）を一人称的に発声するののかと思いきや、そうした発声はひとまとまりの発話のうちの最初だけで、後半は演誦者の三人称的抑制的な発声（傍線部）に収められてしまうのである。曲節の、このような配分は、演誦者の「思い入れ」問題を考える上で、注視すべきものと私は考える。

もし、人物の一人称的発声のことばを、右のような配分で曲節付けするのが平曲演誦の基本と認められるなら、平家語りは「思い入れ」一辺倒ではないのだという『當道要抄』の教えを、平曲譜本としても伝えていることになると考えられるのではなからうか。

以下は、調査結果である。

二 『平家正節』の〈折声〉

〈折声〉については既に特徴や他の曲節との接続の問題、登場の回数など調べたことがある^{注3}が、平家物語の巻第一から巻第八までであった。今回、残りの巻第九から灌頂巻までを含め調べ直し、次のように分けて記号で示すことにした。

発話を扱っている場合

その発話をすべて扱っている場合 ↓ A

発話の途中から〈口説〉になる場合 ↓ B

発話の途中から〈白声〉になる場合 ↓ C

発話の途中から〈口説〉〈白声〉以外の曲節になる場合 ↓ D

発話ではないものを扱っている場合

地の文、文書引用、典拠あることばの引用等 ↓ Z

とする。右の判別にはかなり複雑微妙な問題が介在する場合がある。たとえば、一人の登場人物が、長々と発言する場合（重盛の教訓、灌口入道の説教、建礼門院の六道語りなど）に、様々な曲節が現れ、〈折声〉も複

数回登場することとか、〈折声〉が発言が始まると同時に始まるのなら問題ナシだが、発言が始まる前の語り手による紹介「だれだれが言ひけるは」式のことばから〈折声〉が始まるなどということもある。それらの内実に踏み込むこともおもしろい問題があると思うが、本稿では、主たる観点としての、

感情的な表現をする曲節が、物語中の登場人物の感情的なことばにどのように即応しているのか、に出来るだけ沿って、〈折声〉の場合で言えば、まずは〈折声〉の登場に着目し、そして、その〈折声〉が（人物のことばの範囲内で）別の曲節に転じていくかどうかということに絞って見ることにした。従って、細かな用例を挙げての判定基準の提示は省略することにした。

〈口説〉〈白声〉とその他の〈曲節〉に分けてみたのは、前述のように〈口説〉は平家語りの基本の曲節とも言われる、第三者的視点からの冷静沈着な発声であること、〈白声〉は〈口説〉に準ずる曲節であることで、まずはこの二曲節との接続関係を重視した。〈口説〉〈白声〉以外の曲節への接続となると、たとえば〈折声〉を承けて〈指声〉が、高揚感を押さえ気味にするという例があるが、それは〈折声〉特有の問題に関わるようにも思われる。よって本稿では、〈口説〉〈白声〉以外は一括することにした。

| | | | | | | |
|----------|---|---|---|----------|---|---|
| 卷第一 殿上闇討 | | D | B | 卷第二 鵜河合戦 | | Z |
| 禿童 | Z | | | 願立 | A | D |
| 妓王 | D | Z | D | 神輿振 | B | |
| 二代后 | B | D | | 内裏炎上 | Z | Z |
| 額打論 | B | | | 座主流 | D | D |
| 清水炎上 | B | | | 西光被斬 | Z | B |
| 殿下乗合 | B | D | | 小教訓 | C | D |

卷第三

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----|------|------|------|------|------|------|-----|----|----|----|------|------|------|--------|--------|------|--------|----|------|------|
| 燈籠 | 無文沙汰 | 醫師問答 | 僧都死去 | 有王嶋下 | 少將都還 | 大塔建立 | 御産卷 | 足摺 | 許文 | 蘇武 | 卒塔婆流 | 康頼祝詞 | 山門滅亡 | 德大寺嚴島詣 | 新大納言死去 | 阿古屋松 | 新大納言被流 | 烽火 | 小松教訓 | 少將乞請 |
| Z | B | B | D | B | B | B | D | Z | A | Z | C | A | Z | | | A | | B | D | D |
| | | D | Z | A | Z | D | | C | | | A | | | D | B | B | A | | D | A |
| | | | | | D | | | | | | A | | | D | | | | | | B |

卷第四

卷第五

卷第六

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----|------|------|----|------|------|------|-----|----|----|---|-------|------|---|-----|------|------|------|-------|------|------|
| 紅葉 | 新院崩御 | 奈良炎焼 | 都還 | 伊豆院宣 | 文覚被流 | 文覚強行 | 咸陽宮 | 物怪 | 都還 | 鴛 | 若宮御出家 | 宮御最期 | 競 | 源氏揃 | 嚴島還御 | 嚴島御幸 | 城南離宮 | 法皇御遷幸 | 大臣流罪 | 法印問答 |
| D | A | Z | Z | B | A | A | D | A | A | A | D | Z | A | B | A | D | Z | D | D | B |
| A | | Z | | | | | A | | | | | | | | A | A | | D | D | B |

嗣信最期 D
 弓流 A
 鷄合 Z
 壇浦合戦 A
 先帝御入水 Z B
 能登殿最期 Z
 内侍所都入 Z
 劔之卷 B
 鏡之卷 A
 平大納言文沙汰 A
 副将被斬 B
 腰越 C
 大臣殿誅罰 B B

三 『平家正節』の〈強声〉

〈折声〉と同様に記号で示すと。

卷第一 殿上闇討 B
 鹿谷 Z Z
 鵜河合戦 B

卷第十二 重衡被斬 B B

平大納言被流 B
 土佐坊被斬 A
 判官都落 Z
 六代乞請 B A Z B D
 泊瀬六代 Z
 六代被斬 Z
 灌頂卷
 女院御出家 Z Z
 小原入御 Z
 小原御幸 D B Z A
 六道 A Z D B
 御往生 Z Z

卷第二 座主流 B
 小松教訓 B
 卷第三 頼豪 B

四 〈折声〉〈強声〉の現れ方の集計

平家物語十二卷および灌頂卷について、〈折声〉と〈強声〉の現れ方を並べてみる。

| | 灌頂卷 | 卷第十二 | 卷第十一 | 卷第十 | 卷第九 | 卷第八 | 卷第七 | 卷第六 | 卷第五 | 卷第四 | 卷第三 | 卷第二 | 卷第一 | 〈折声〉 | 〈強声〉 |
|------|-----|------|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|------|
| | 2 | 2 | 5 | 10 | 5 | 3 | 3 | 6 | 5 | 4 | 3 | 6 | 1 | A | A |
| | 2 | 5 | 6 | 4 | 3 | 1 | 6 | 0 | 1 | 1 | 7 | 6 | 7 | B | B |
| | 0 | 0 | 1 | 2 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 2 | 1 | C | C |
| | 2 | 1 | 1 | 11 | 2 | 1 | 5 | 6 | 1 | 2 | 8 | 8 | 7 | D | D |
| | 7 | 4 | 4 | 3 | 0 | 1 | 1 | 4 | 3 | 1 | 5 | 3 | 5 | Z | Z |
| (ナシ) | 2 | 3 | | | 5 | 1 | 0 | 1 | 3 | 2 | 0 | 0 | 0 | A | A |
| | 0 | 2 | (ナシ) | | 2 | 2 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 2 | 2 | B | B |
| | 1 | 4 | | | 5 | 0 | 1 | 0 | 2 | 2 | 0 | 0 | 0 | C | C |
| | 0 | 0 | | | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | D | D |
| | 0 | 1 | | | 0 | 1 | 2 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | Z | Z |

| D | C | B | A |
|---|----|----|----|
| ⋮ | ⋮ | ⋮ | ⋮ |
| 2 | 15 | 12 | 17 |

次に〈強声〉はすべてで54で〈折声〉に比較すれば頻繁に登場する曲節ではないというべきだろうが、合戦場面の多い巻第九や巻第十一に相対的に多く、巻第十や灌頂巻にはないということ、なるほどと思う。扱い方ごとの集計は以下の通りである。

登場人物の一人称的発声まるまるを〈折声〉というのが思いの外多いというのが正直な感想で、また登場人物の発声でないいわば地の文での〈折声〉も効果を發揮しているのだということが推察されるのである。

| Z | D | C | B | A |
|----|----|---|----|----|
| ⋮ | ⋮ | ⋮ | ⋮ | ⋮ |
| 41 | 55 | 8 | 49 | 55 |

〈折声〉はすべてで208だが、扱い方ごとの集計は、以下の通りである。

Z
……
8

〈強声〉の場合に目立つのは、Dすなわち登場人物の発声を他の曲節で承けていくとしても、〈口説〉や〈白声〉ではない曲節で承けることが少ないことである。二例はいずれも〈捨〉につながっている。逆に〈折声〉との対比で言えば、Cの〈白声〉で承ける割合が多いことにも気づく。

これらの概観をもとにしての、平家物語本文と語り主体の関係、平家物語本文と演誦者との関係については、別の機会に検討したいと思う。

さて、本稿で問題としたのは、〈折声〉にしても〈強声〉にしても、発声部分との重なり具合であるから、A に対して、B、C、Dがどのような数になるのかが、まずは大事である。

これを集計すると、

| | | |
|---|--|-----|
| A | | 72 |
| B | | 141 |
| C | | 141 |
| D | | 141 |
| Z | | 49 |

となるから、発言まるまるを〈折声〉または〈強声〉で扱う場合より、途中から他の曲節につないで終わらせる場合の方が倍になっている。平曲の演誦として、「登場人物へのなりきり」とか「思い入れ」というのは、基本的なことではないということが分かるのである。

おわりに

本稿は、平曲演誦者の心得として、平家物語の本文、内容にどのような位置をとるべきかという問題について、私自身が日頃のお稽古で感じていた、平曲譜本（本稿では『平家正節』のみをみたのだが）が示していることを、数値を出して確認してみたのである。

『當道要抄』の伝えている「餘思ひ入の過たるハ思ひ入の無よりもあし、」は、『平家正節』の曲節配分に残されているのだと私は考える。

しかし、それはそれとして、平曲譜本には、微妙な、細やかな表現をせよという指示もある。文字でそうした指示が書かれている場合もあるが、墨譜の付けられ方に工夫が認められることもある。ただ、それらは演誦者に対して、これこれのような発声表現をせよとはあるが、これこれのような気持ちになれとは言っていないのだろうと、私は思っている。

本稿で検討したことは、曲節の配分の問題に関しても、他の譜本の調査も含めて、さらに個々の例を検討してみたいと考えているが、墨譜次元での検討も必要になってくるだろうと考えている。

注

1 師・橋本敏江は、ある箇所墨譜と本文の扱い方に関して、「私ならこう発声する」とおっしゃって範をお示しになることがしばしばだったが、「人物の気持ちになって発声しなさい」というようなことはおっしゃらなかった。

2 尾崎家本平家正節は、影印本（一九七四。大学堂書店）およびDVD版（二〇一一。荻野検校顕彰会）によったが、具体的な作業には、鈴木本の翻字入力による「平家正節による平家物語」（科研費報告書として作成。平家物語巻第一〜八は、二〇〇六、三。巻第九〜灌頂巻は、二〇一八、五〜二〇一九、二。）を使用した。従って、調査結果は、平家正節の配列順によらず、平家物語の巻の順と章段の順に示してある。

3 〈折声〉に関しては、拙著『平曲と平家物語』（新潟大学人文学部研究叢書2。知泉書館。二〇〇七、三）第二部第四章第三節で考えたことがある。また「感情表現」ということでは、拙稿「平曲における感情表現―シヨリということ―」（新潟大学「人文科学研究」第一三六輯。二〇一五、三）で考えたことがある。

附記 本稿は、令和三年度（延長）日本学術振興会科研費・基盤研究（C）「平曲伝承資料の基礎的研究」（課題番号16K02362）による成果の一端である。